長野市の埋蔵文化財第21集

芹田小学校遺跡

―芹田小学校校舎増改築事業に伴う発掘調査報告―

1987・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

中央アルプスを源流とし、歴史の中に派格を幾多にも変えながらえていまも善光寺平を悠然と流れ行く犀川。この大河は悠久の太古より豊穣なる自然の恵みを大地に与え、人々に生活の営みの場をもたらしてきました。

今回調査対象となりました犀川流域に存するこの遺跡は、ここに数十年の歳月の流れを経て、既に老朽化した長野市立芹田小学校の校舎改築事業にともない、やむを得ず昭和61年度に緊急発掘を実施したものであります。

かつての律令時代、水内郷8郷のうちの「芹田（世無多）郷」であったこの地域は古代集落の存在が十分に推察され、またこの遺跡付近からは箱清水式土器が出土し、前方後円墳南向塚古墳が存在することよりして、古代「芹田」の地に埋る文化遺産を探る貴重な基礎資料として、この冊子が今後広く活用されることを希望します。

なお、この発掘調査のためにご協力いただきました芹田小学校、および地元の関係者のみなさまをはじめ、遺跡調査会、調査団の各位と整理作業にご参加いただいた、長野市立博物館の諸氏に心から感謝を申し上げます。

昭和62年3月31日

長野市教育委員会教育長

長野市遺跡調査会長　　奥村　秀雄

例　言

1　本書は長野市立芹田小学校校舎増改築事業に先だって行った発掘調査報告書である。

2　調査は長野市教育委員会総務課と同・社会教育課の協議に基づき、長野市遺跡調査会が担当した。

3　遺構図は1:60を基本とした。遺物実測図は一部を除き1:3に統一し、スクリーンで黒色処理を示した。

4　調査は矢口の指導に基づき千野が総括し、記録は各調査員が分担して行った。

5　本書の編集は千野が行い、遺物実測は中殿、横山が、トレースは千野が行った。

6　執筆はI・IV章を青木が、III章を千野が行い、II章は和田が担当した。

7　調査の諸記録及び遺物は長野市立博物館において保管している。

目　次

序

例言

I　調査に至る経過

1　芹田小学校校舎改築事業……1

2　調査会及び調査団……1

II　遺跡周辺の環境

1　地理的環境……3

2　歴史的環境……3

III　調査内容

1　調査経過　調査の方法……7

2　遺構と遺物……12

IV　調査のまとめ……20

挿図目次

図１　遺跡周辺の地形……4
図２　調査対象地……6
図３　試掘調査トレンチセクション実測図①……7
図４　試掘調査トレンチセクション実測図②……8
図５　芹田小学校校舎配置図及び発掘調査地……10
図６　遺構配置図……11
図７　１号住居址実測図……13
図８　１号住居址出土土器実測図……14
図９　２号住居址実測図……14
図10　２号住居址出土土器実測図……15
図11　２号溝址実測図……16
図12　１号溝址実測図……17
図13　１号溝址出土土器実測図……18
図14　検出面出土土器実測図……18
図15　墨書土器実測図……19

Ⅰ　調査に至る経過

1　芹田小学校校舎改築事業

長野市街南端の薬田・稲葉地区（芹田）は、犀川・裾花川に近接するという地理的条件から、比較的堆積活動が活発な地域に当たる。このため、当該地域の埋蔵文化財は、深い堆積土下に埋没しているものと考えられ、既知の遺跡は数カ所を数えるのみである。しかし、この地域が「水内郡芹田郷」に比定され、歴史的に重要な位置を占めている点を考慮すれば、未知の遺跡が数多く存在することは想像に難くない。

長野市教育委員会総務課では、老朽化した校舎の改築事業として、昭和61年度に、長野市立芹田小学校の校舎増改築事業を計画した。事業着手に先立ち、社会教育課は、同予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するために、試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、昭和61年５月10・11日に実施された。事業予定地内においては、既存の構造物が存在しているため、限られた範囲内での試掘にとどまったが、土器破片等の遺物とともに、地表下１ｍ内外の位置に遺構の存在が確認されるに至った。このため、市教育委員会では、施工に先立ち発掘調査による記録保存の必要性を認め、校舎建設予定地内における既存の構造物の撤去を待って、調査に着手する運びとなった。

また、調査範囲は、当初の部分的な試掘結果から判断して、施工面積約1300㎡のうち600㎡の面積を予定していたが、調査着手時に空き地となった施工範囲内を再度試掘調査した結果、調査面積は220㎡に減少した。

なお、本遺跡は、長野市大字稲葉字上千田沖に所在する。芹田小学校北辺を境として薬田地籍となるため、稲葉地籍の最北端に位置するといえる。新発見の遺跡であり、その名称については所在する学校名に因んで「芹田小学校遺跡」として報告するものである。

2　調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画及び、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

調査会　会　　長　奥村秀雄（長野市教育委員会教育長）
　　委　　員　米山一政（長野市文化財保護審議会長）
　　桐　原　健（長野市文化財保護審議会委員）
　　清水営一（長野市教育委員会教育次長）
　　関川千代丸（長野市教育委員会文化財専門主事）

矢口忠良（長野市立博物館学芸員）

監　　事　高野　覚（長野市教育委員会総務課長）

事務局長　吉見　敏（長野市教育委員会社会教育課長）

〃　局員　吉池弘忠（長野市教育委員会社会教育課主幹）

山崎博三（長野市教育委員会社会教育課主査）

調査団　調査団長　矢口忠良（長野市立博物館学芸員）

調査員　山口　明（長野市立博物館学芸員）

青木和明（長野市立博物館学芸員）

千野　浩（長野市立博物館学芸員）

奈須野由美（長野市立博物館嘱託）

中殿章子（長野県考古学会員）

横山かよ子（長野県考古学会員）

出河裕典（信州大学学生）

小岩井久仁（　〃　）

原　正樹（東京経済大学学生）

原田和彦（国学院大学学生）

執筆者　和田　博（長野市立博物館専門主事）

作業員　山口竹二郎　下村律　大峡大作　宮本清治　宮沢常男　芳野博　中村親志
岡本武光　宮沢丈夫　染野卯年　青沼隆之　斎藤義雄　中村至博　滝沢光明

調査にあたっては、芹田小学校関係各位に種々便宜をはかっていただいた。また、整理作業では長野市立博物館諸氏の協力を得た。記して感謝申し上げます。

II　遺跡周辺の環境

1　地理的環境

犀川や裾花川が現在の流路をとるようになったのは、近世初頭以来の流路改修によってである。それ以前の犀川は、小松原・四ツ屋付近から幾条もの支流を東南流させ、本流は現流路よりやゝ北沿いを経て長池と大豆島の間を東北流していた。

また、裾花川は地質時代には新諏訪を谷口としていたが、次第に谷口を南下させて中世ごろには妻科付近から東南流していた。現在でも八幡・南八幡・古川等の各用水が往時の流路をほゞ示しているほか、市街地にあっては長野商業高校や後町小学校及び長野保健所の各南側、栽松院裏付近などのように河岸段丘崖やその痕跡をほゞ連続して残し、新市街地域では旧河床が水田などの低湿地、しかも所々で旧河畔の段差を明確に残していたりするが、戦後の市街地拡大の波にのって次第に団地が造成されたり、公共施設や事業所等の敷地となって地貌をかえている所も多い。

本遺跡が所在する芹田地域は、以上のような犀川及び新旧裾花川に囲まれ、ほとんど大部分が裾花川の沖積によって形成されている。微視的には、犀川は南岸が攻撃面となって浸食川欠けを繰返えし、北岸の芹田地域南部は堆積面となり、信大工学部以東では自然堤防を形成し、それ以北は広々とした後背湿地であった。が、裾花川の旺盛な堆立て、それも近世以前の堆積活動はもちろん、流路が現在のように変更されてからも常襲のようなたび重なる氾濫（はんらん）などによりますます堆積作用が進み、現在では200 分の１程度の極めてゆるい東南さがり傾斜を示す沖積地を形成し、自然堤防との比高差をなくし、所によっては沖積層が自然堤防を越えてもいる。そのため、かつては後背湿地帯を東流していたと推定される古川などが自然堤防上を南流し、当該地帯は沖積地先端の河岸段丘状を示してさえいる。

このような自然堤防と沖積地域との接譲地域の一角に本遺跡は所在する。遺跡の生活床面は現地表の約１ｍ地下にあり、その上に重なる土層は堆積の旺盛さを示すと共に、粒子がこまかく粘土質という沖積地端末の特徴的様相を見せている。現在沖積地には水田を主とした耕地も分布し、自然堤防上には南市・上千田・母袋など古くからの集落が点在し、これら集落南端付近には河岸段丘崖が連続していたというが、市村神社西南などでは現在もその面影を留めている箇所が点在する。たゞし、南市以西の現地表では自然堤防と観察され得る地形はなく、たゞ一面に優勢な沖積平野としての景観が展開している。

2　歴史的環境

芹田地域では遺跡調査発掘の前例はないが、本調査地点近くの芹田小学校グランド拡張時に箱清水式土器を拾得しているほか、日詰では古墳時代の土師器、九反・荒木・文大付属長野高校から平安時代の土師・須恵器の出土が報告されている。また旧裾花川をはさんだ南高田の微高地には、北信では沖積地に構築された唯一の前方後円墳である南向塚古墳がある。

図1　遺跡周辺の地形（1：20,000）

芹田地域は、律令時代には水内郡８郷のうちの芹田（世無多）郷で、旧裾花川以北は芋井（伊毛為）郷、東は尾張（乎波利倍）郷であり、前述の後背湿地や旧裾花川流域の湿田に生活のよすがを得て、自然堤防などの微高地に集落を点在させていたと考えられる。なお古牧地域では広い地籍にわたって条里制遺構が認められるとされるが、隣接地でありながら本地域にはそのような見解はない。この時代に錦織で東山道と分岐して高志（越）に通じていた東山支道の亘理は、従来小市付近とされていたが近年では、犀川支流の中流付近に比定する意見が有力となっており、その説によれば道筋は古くから本地域付近を通過した可能性が大きい。

平安時代後期には市村などを平正弘が領有していたが、1156(保元１)年の保元の乱の結果高田郷と共に没官領となり、次いで後院領すなわち後白河法皇の荘園に繰入れられた。当時、本遺跡付近に公領の千田郷や千田小中島郷も所在していたとされている。その後、平家討伐の旗印を挙げた木曽義仲が横田河原で城資職の大軍を打破ったが、その前哨戦として２年前の1180(治承４)年にこゝ市原で平家党の笠原頼直軍を栗田範覚らが撃退している。

この栗田氏は源頼信流村上氏の支族で、犀川以北に於ける村上一族の拠点としてこの交通上の要点をおさえ、千田・市村などの分族を配してこの地に本拠をおいて次第に勢力を伸張した。栗田の地を戸隠に寄進して井上氏にかわってそこを支配し山栗田に専任させ、甲越対戦期には本家の村上氏と袂を分かち武田方の旗頭として活躍し、特に甲府善光寺別当として著名である。

この中世には、室町期に起きた２回もの漆田の戦をはじめ、川中島合戦に於ける1555(弘治１)年の犀川対陣にはしばしばこの地域で小ぜり合いが行われたのも、この地籍が交通上の要衝であった事実を物語り、現存している姫塚や仏導寺が熊谷直実にまつわる伝承を今に伝えるのも、綱島などの地名と共にその傍証にほかならない。

近世には、北国往還が従来より西寄りに整備され、現在の丹波島橋付近が舟渡し場となっても市村の渡しの呼称は続けられていた。そのころ千田と街道筋の荒木とは中御所・栗田の半分と共に天領、栗田の一部が戸隠領、残りの千田・中御所の半分と市村とが松代領に分割統治されていた。これも中世からの由緒と交通上の要点という因子が強く働いていたからによっている。

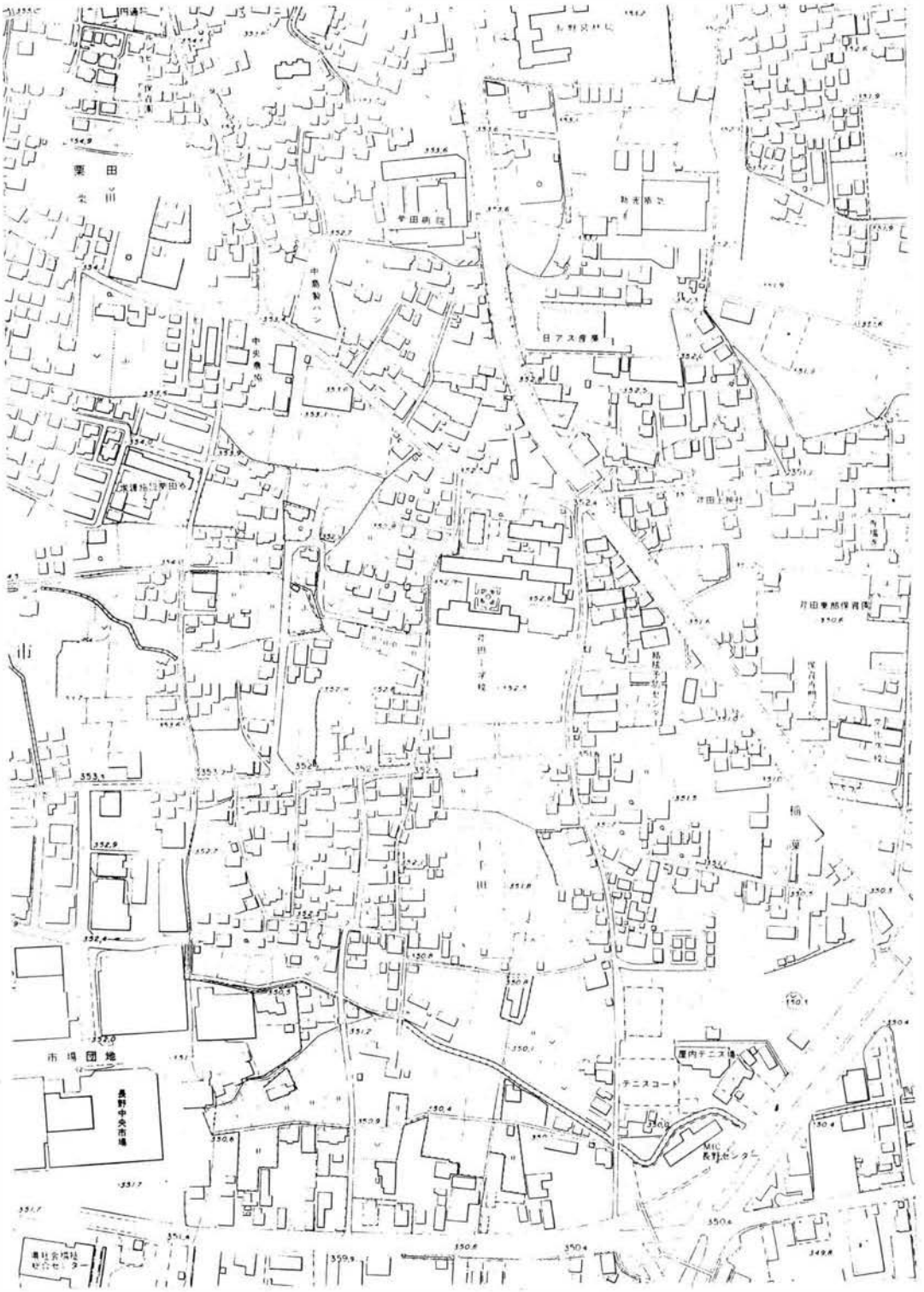


図2　調査対象地（1：5,000）

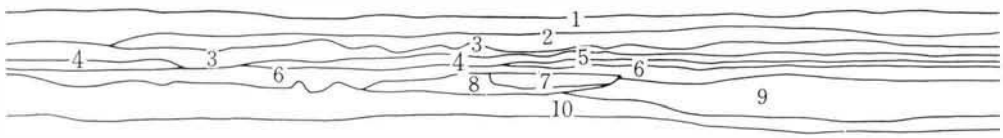
III　調査の内容

1　調査経過と調査の方法

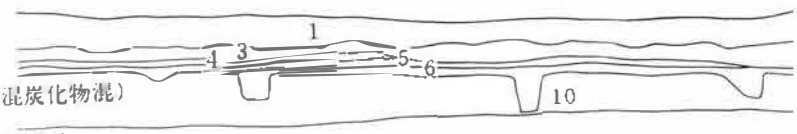
調査の経過

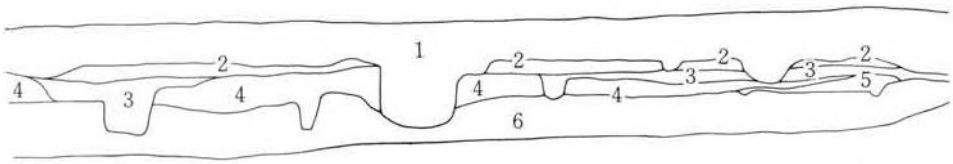
昭和61年５月10・11日に、事業予定地内における埋蔵文化財の存在の有無を確認するため、試掘調査を実施した。調査はトレンチを予定地内の任意の４ケ所に設定したが、そのうち第１トレンチ・第３トレンチにおいて、遺物包含層ならびに遺構と思われる落ち込みが確認され（図３）、事業施工前に発掘調査を実施し、記録保存を行う必要性が確認された。

事業用地内における旧校舎等の構造物の撤去を待ち、昭和61年７月21日より発掘調査に着手した。調査対象地の大部分が旧校舎敷地内であったため、調査範囲の確定にあたり、再度、事業予定地内の試掘を行った（図４）。その結果、体育館新築予定地内においては、包含層や遺構等の存在せぬことが明らかとなり、事業面積約1300m²中220m²にあたる校舎増築予定地にのみ調査範囲を限定した。調査によって発見された遺構は、住居址２軒及び溝址に限られ、伴出した遺物も少量



1.表土
2.暗茶褐色粘質土層
3.混円礫粘質土層
4.暗黄褐色粘質土層
5.暗黄褐色粘質土層
（青灰色粘土ブロック混炭化物混）
6.暗茶褐色粘質土層
7.暗黄褐色粘質土層（粘性弱）
8.暗茶褐色粘質土層
9.暗茶褐色土層
10.暗黄茶褐色粘質土層

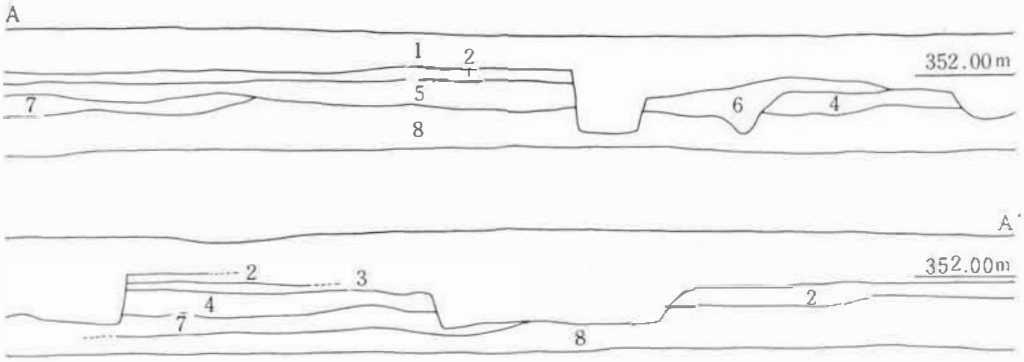




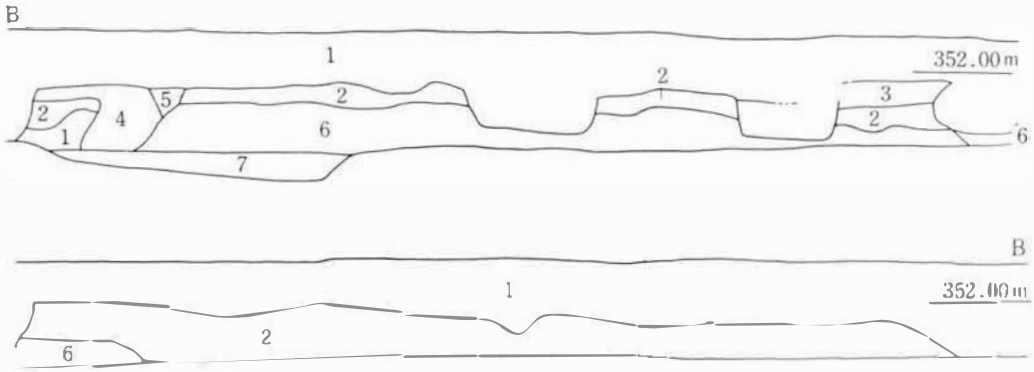
1.表土層（攪乱層）
2.暗黄橙色粘質土層
3.暗黄橙色粘質土＋暗青灰色粘質土
4.暗黄橙色粘質土＋暗青灰色粘質土
5.暗黄茶色粘質土層
6.暗黄茶褐色粘質土層（暗青灰色粘土ブロック混）

0　2 m

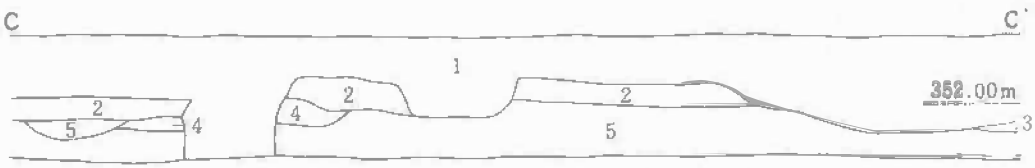
図３　試掘調査トレンチセクション実測図①（１：80）



1　表土層（撹乱層）
2　黄褐色土層（粘性有）
3　黄褐色土層
4　黄褐色土層（粘性弱）
5　灰褐色土層
6　黒褐色土層（炭化物混）
7　暗青灰色粘質土（粘性弱）
8　暗青灰色粘質土（粘性強）



1　表土層（撹乱層）
2　灰褐色土層
3　暗茶褐色土層（撹乱層）
4　灰黄色砂層
5　灰黄色砂層
6　暗青灰色土層
7　暗茶褐色粘質土層



1　表土層（撹乱層）
2　暗灰色砂質土層
3　黄褐色土層（焼土、炭化物混）
4　灰褐色土層
5　灰褐色土層（粘性弱）

図4　試掘調査トレンチセクション実測図②（1：80）　0　2m

であり、調査は昭和61年７月30日に終了するに至った。

その後、遺物整理および報告書作成の作業を長野市立博物館において実施し、本報告書刊行に至った。

発掘調査の方法

試掘調査は、バックホーを用いてトレンチを掘削し、遺物包含層・遺構面を調査した結果事業予定地約1300㎡中220㎡について全面発掘調査の必要性を確認するに至った。調査範囲の表土除去は試掘調査の結果に基づき、バックホーを援用した。

遺構検出作業の際に出土した遺物については、「検出面出土の遺物」として取扱った。 遺構内遺物については、ほとんどが覆土中の小破片で量的にもわずかであったため、調査時においては出土遺構ごとに適宜に一括してとりあげた。

写真撮影については遺構毎に、遺物出土状況・掘り上がり状況・遺構内細部についておこなった。

遺構実測は、標高・南北軸ＢＭを基礎に２ｍメッシュを設定し１：20の縮尺で実施した。

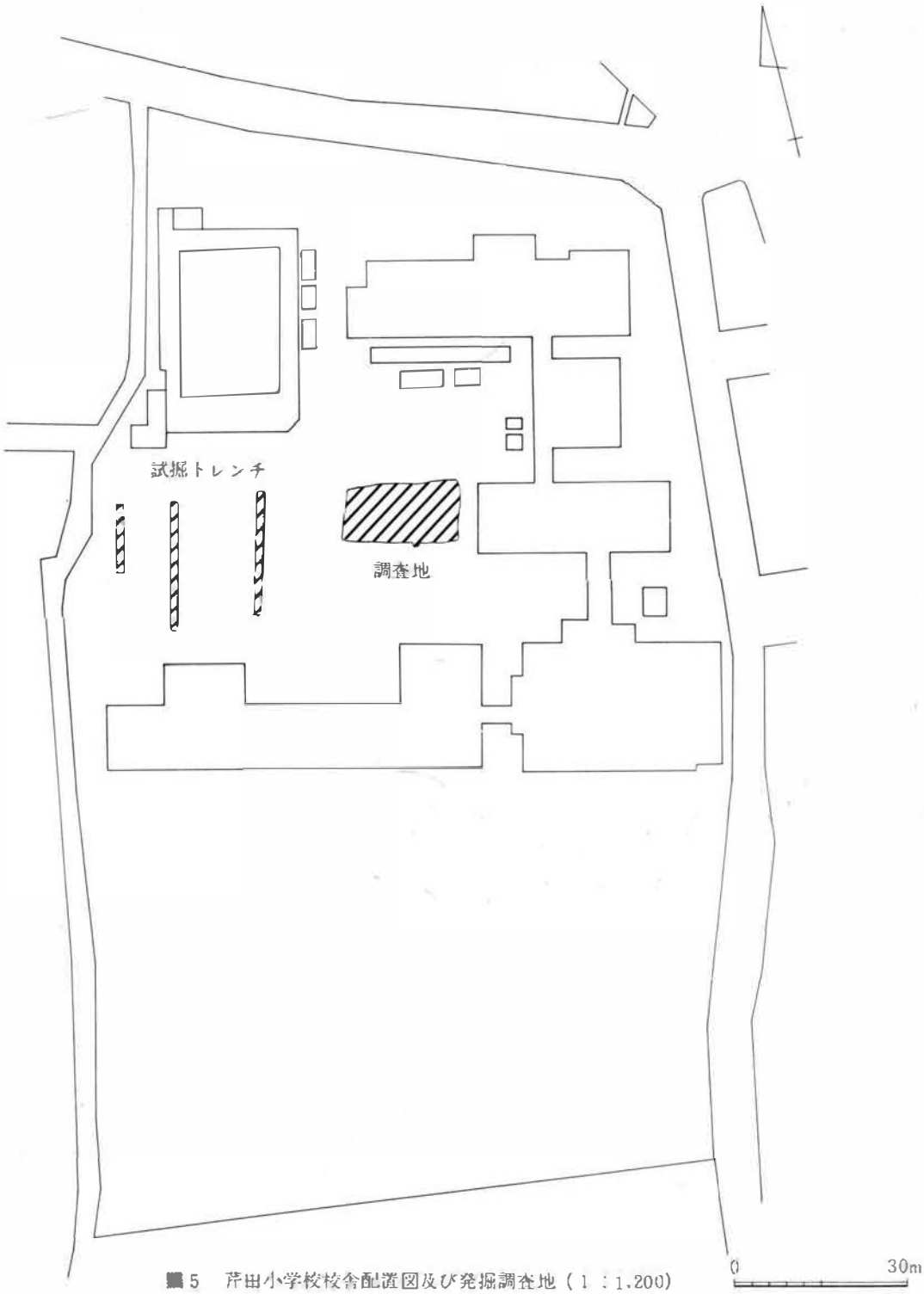


図5　芹田小学校校舎配置図及び発掘調査地（1：1,200）

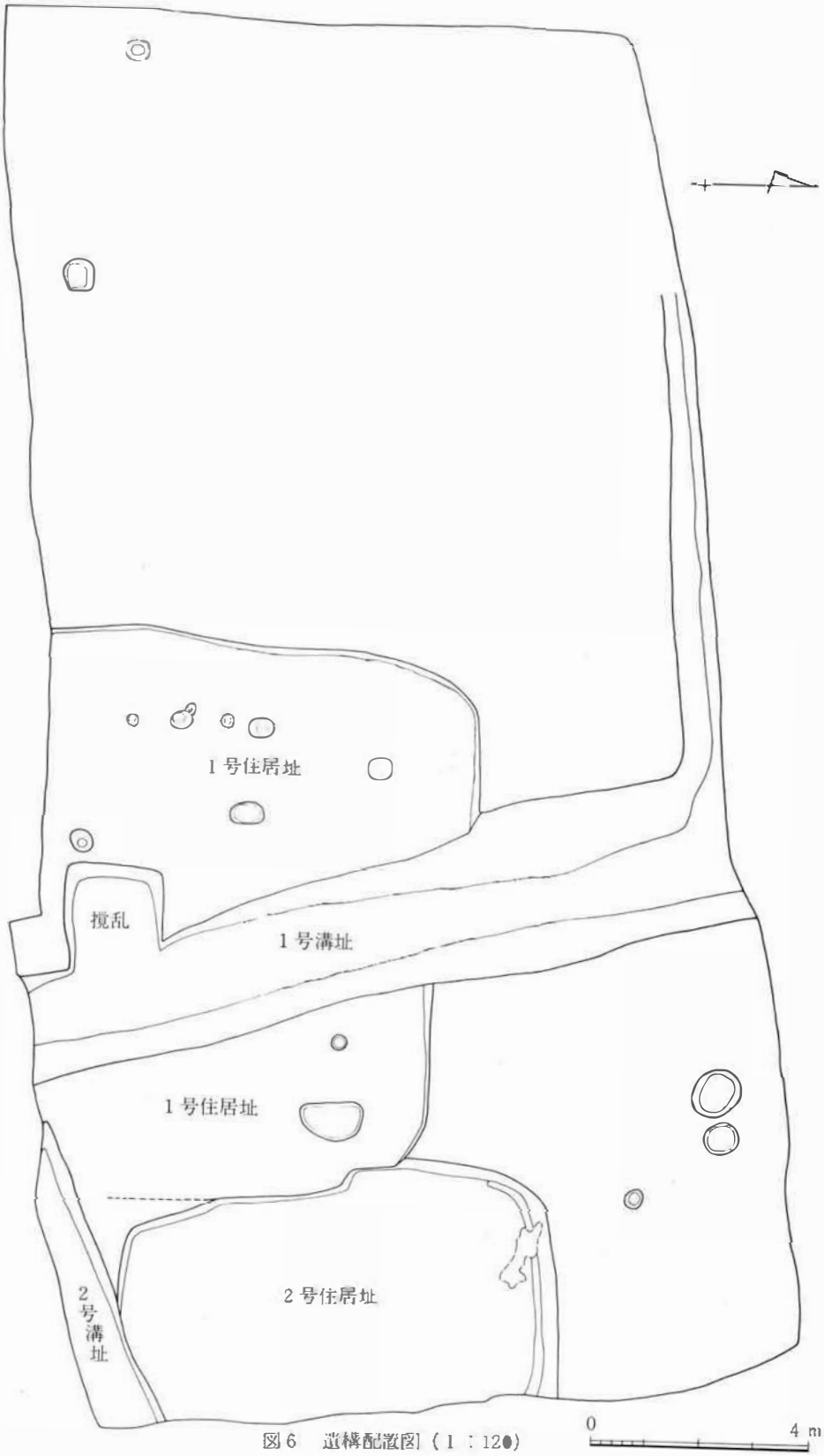


図6　遺構配置図（1：120）

2　遺構と遺物

1号住居址（図7・8）

〔遺構〕　発掘区の南端で検出された住居址で、中央部を1号溝址に、東側を2号住居址に切られている。平面プランは隅丸長方形を呈すると思われ、規模は東西軸7.74mを測る大型の住居址である。壁高は20～30cmを測り、壁面は垂直に近く掘り込まれている。柱穴は西側に並んで検出されているが、主柱穴は明確に把握し得なかった。床面は全体に固くしまっており良好といえよう。カマドは検出されなかったが、床面上より焼土塊が2ヶ所検出されている。また西南隅の床面上より人頭大前後の河原石がまとまって出土しているが、性格は不明である。本住居址は、出土遺物より、平安時代のものと考えられる。

〔遺物〕　覆土内より、甕・羽釜・高台付坏・坏形土器が出土しているが、いずれも小破片であるため詳細は不明である。(1)は甕の口縁部破片で、内外面ともロクロによる調整痕を顕著に残す。(2)は羽釜である。(3)・(4)・(6)～(8)は灰釉陶器の口縁部破片である。口唇部の外反のゆるやかなもの(2)・(3)と、強く外反する(6)～(8)が存在する。(9)は須恵器坏、(10)は土師器坏の口縁部破片である。(12)～(14)はいずれも灰釉陶器高台付坏の底部破片である。(15)は須恵器坏の底部破片で、底部には回転糸切り痕が残る。(16)は土師器坏の底部破片で、内面は黒色処理され、底部には回転糸切り痕が残る。(17)も土師器坏の底部破片である。

2号住居址（図9・10）

〔遺構〕　発掘区の東南端で検出された住居址で、1号住居址を切って構築され、2号溝址に切られる。東側約半分は未発掘で詳細は不明である。平面プランは、南北約6.14mの隅丸長方形を呈するものと思われる。壁高は35～40cmを測り比較的深い。西壁は、垂直に近く掘り込まれている。柱穴等は検出されなかった。北壁の西寄りの部分に焼土塊が集中して検出された。原因等の詳細は不明であるが、カマド構築材の一部であると考えられる。また住居址中央東側の床面上からも焼土の堆積が2ヶ所検出されているが、性格は不明である。出土遺物より平安時代の住居址と考えられる。

〔遺物〕　長頸壺・羽釜・坏形土器などが出土しているが、いずれも小破片のため、詳細は不明である。(1)・(2)は須恵器長頸壺の頸部から肩部にかけての破片で、(2)は外面に自然釉が付着する。(3)・(5)は羽釜の破片で、(3)はロクロ調整痕を顕著に残す。(4)は灰釉陶器坏の口縁部で、口唇部はやや強く外反する形態をとる。(6)～(13)は土師器坏である。(6)～(9)は坏部が底部から短くやや内湾ぎみに立ち上る形態をとり、内外面ともロクロ調整痕を顕著に残し、底部にはいずれも回転糸切り痕を残す。(11)は内外面とも黒色処理され、内面および口唇部は磨かれる。(12)・(13)は坏部がやや深い形態を呈するもので、(13)は内面が黒色処理される。(14)は灰釉陶器高台付坏である。(15)～(17)は坏底部破片であるが、(15)は須恵器である。いずれも底部に回転糸切り痕を残す。(18)・(19)は小形甕の底部破片であろうか。

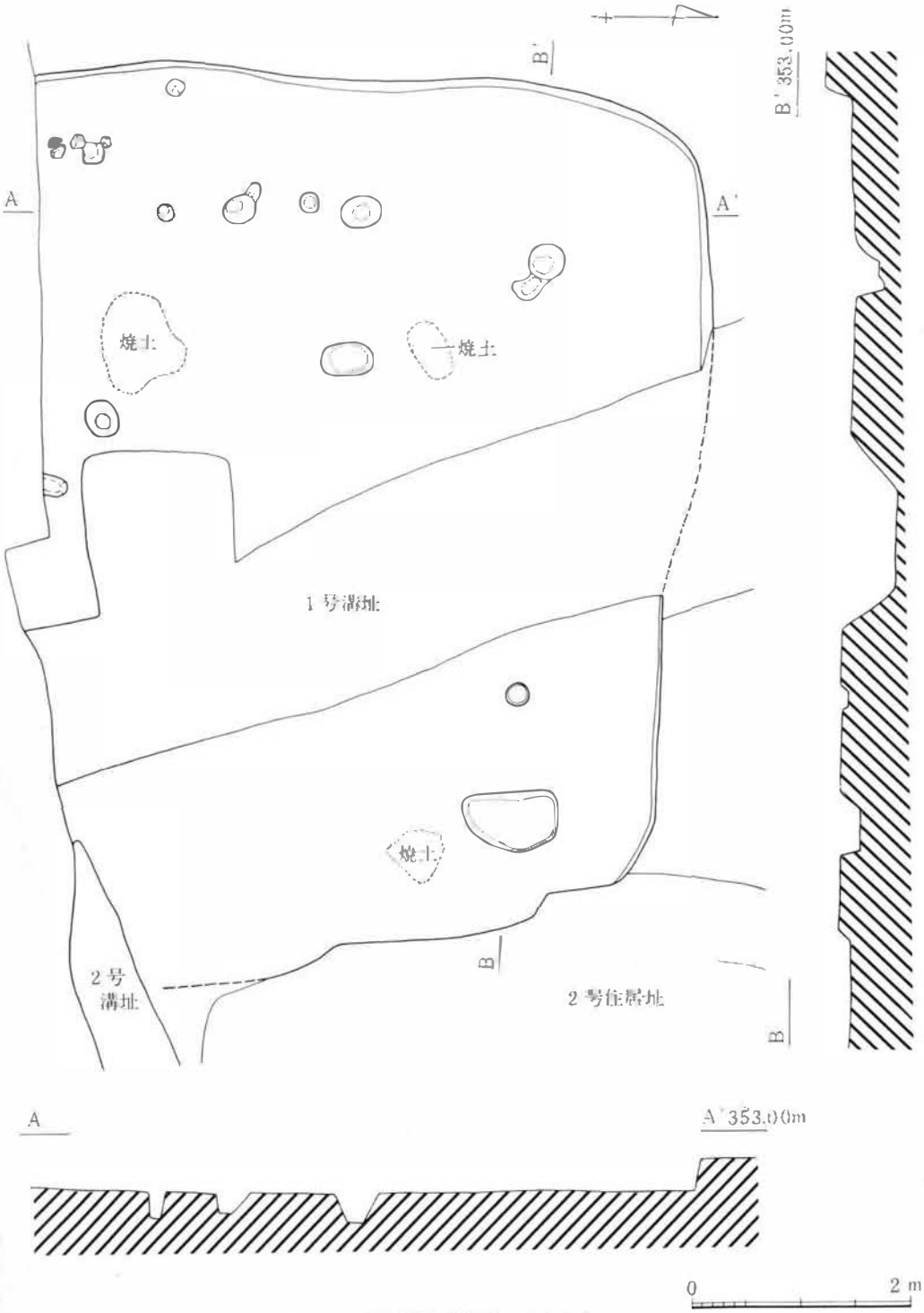


図7　1号住居址実測図（1：60）

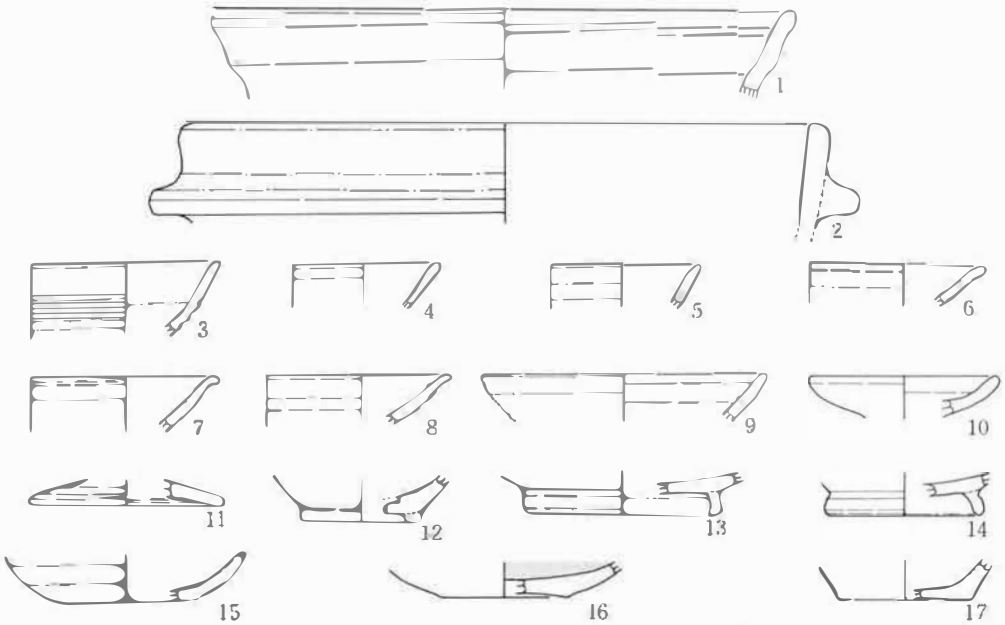


図８　１号住居址出土土器実測図（１：３）

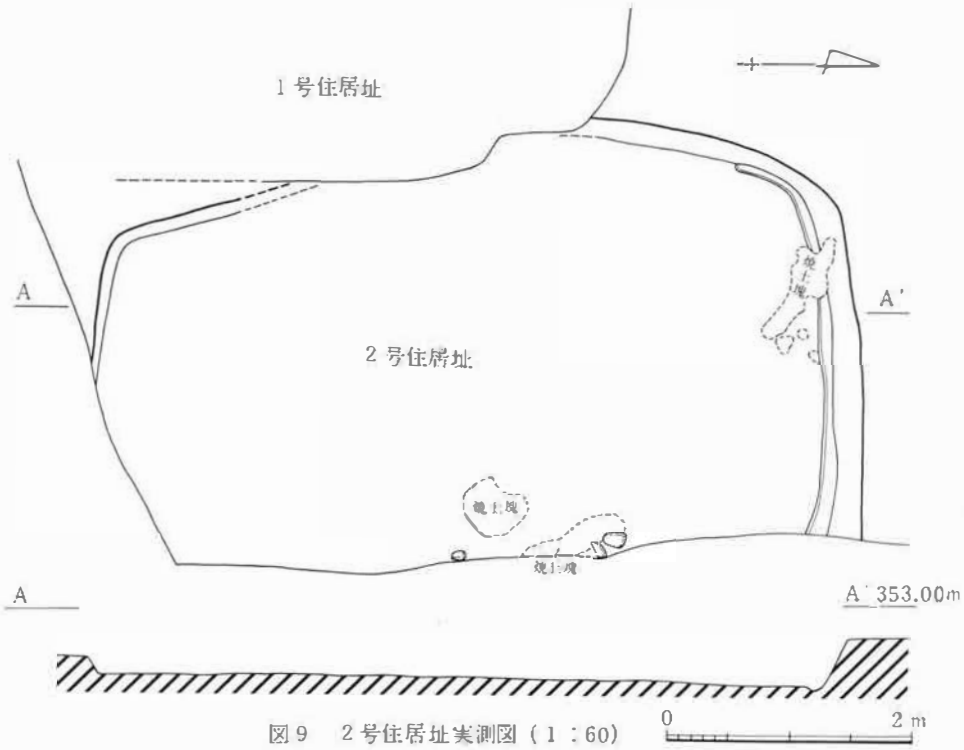


図９　２号住居址実測図（１：60）

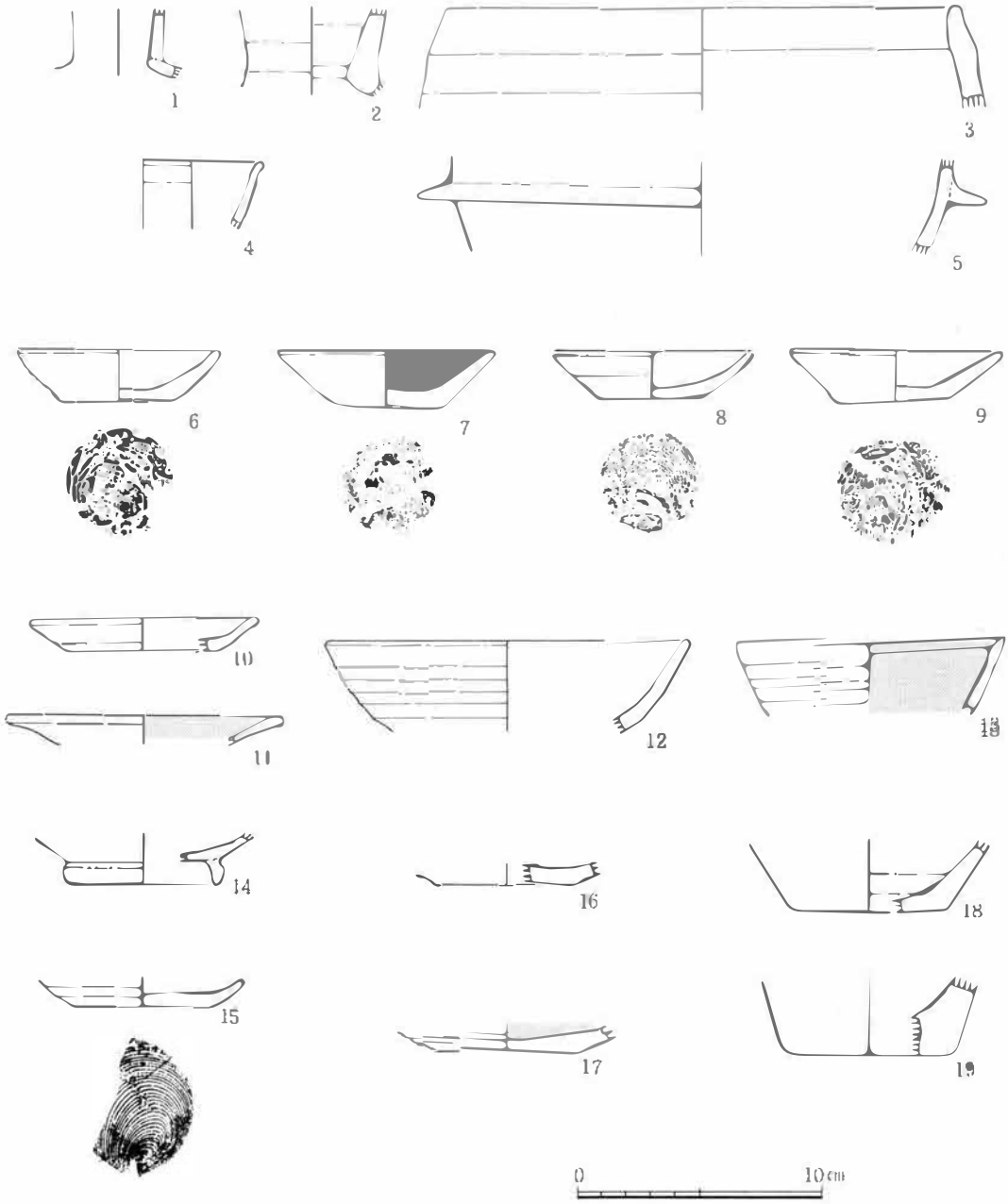


図10　2号住居址出土土器実測図（1：3）

1号溝址（図12・13）

〔遺構〕　1号住居址を切って発掘区を南北に貫き、北端でほぼ直角に近く西方へ向きを変えて伸びてゆく。幅は1.40m～2.36mを測り、深さは平均50cm前後であるが、最も深いところでは84cmを測る。遺物は南端付近で、溝底に接する状態で比較的まとまって出土しているが、その量は少なく、また焼土を伴うことより住居址が存在した可能性も考えられるが明らかにし得なかった。

〔遺物〕　長頸壺、甕、坏形土器がある。(1)は灰釉陶器の小型長頸壺、(2)は須恵器の大型長頸壺、(3)は灰釉陶器の長頸壺底部と思われる。(4)・(5)は甕形土器の口縁部破片であり、ともにロクロ調整痕を顕著に残す。(4)の肩部内面にはカキメが認められる。(6)は小形甕の口縁部破片で、内面にはヘラによる調整痕が比較的顕著に認められる。(7)～(10)は坏形土器であるが、(8)・(10)は内面が黒色処理され、(10)は底部に回転糸切り痕を残す。

2号溝址（図11）

発掘区東南端に検出された溝址で、第2号住居址を切っている。4.5 mほど確認できたが南側と東側はともに調査区外となり、形態も明確ではないが、検出された南端がこの溝の南端となろう。深さは30～40cmを測る。出土遺物もなく時代、性格ともに不明である。

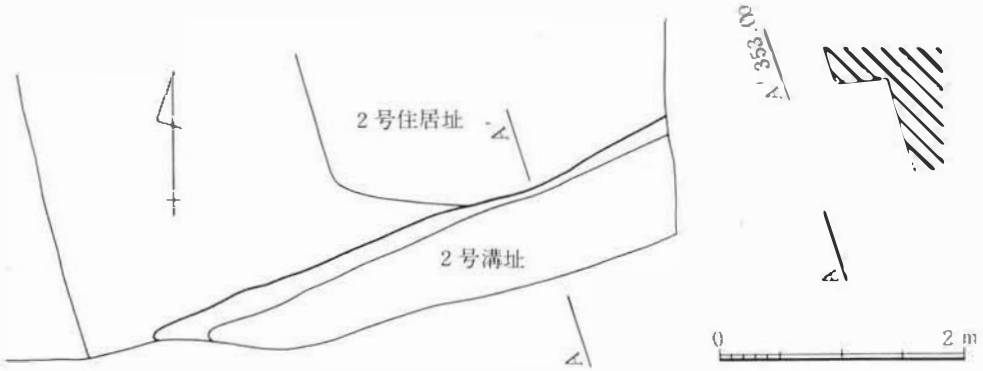


図11　2号溝址実測図（1：60）

検出面出土の遺物（図14）

甕・鉢・高台付坏・坏形土器等が出土している。(1)は甕で口縁部は頸部より強く外反し、端部は面をなす。内外面ともにカキメが顕著である。(2)は大型の鉢であろうか。内面は黒色処理されるとともに、カキメを顕著に残す。(3)は須恵器の高台付坏、(4)は灰釉陶器の高台付坏、(5)は土師器の高台付坏である。(5)は内面が黒色処理される。(6)は須恵器の坏でロクロ調整痕を顕著に残す。(7)・(8)はともに土師器坏の底部破片で、回転糸切り痕を残す。(8)は内面が黒色処理されている。

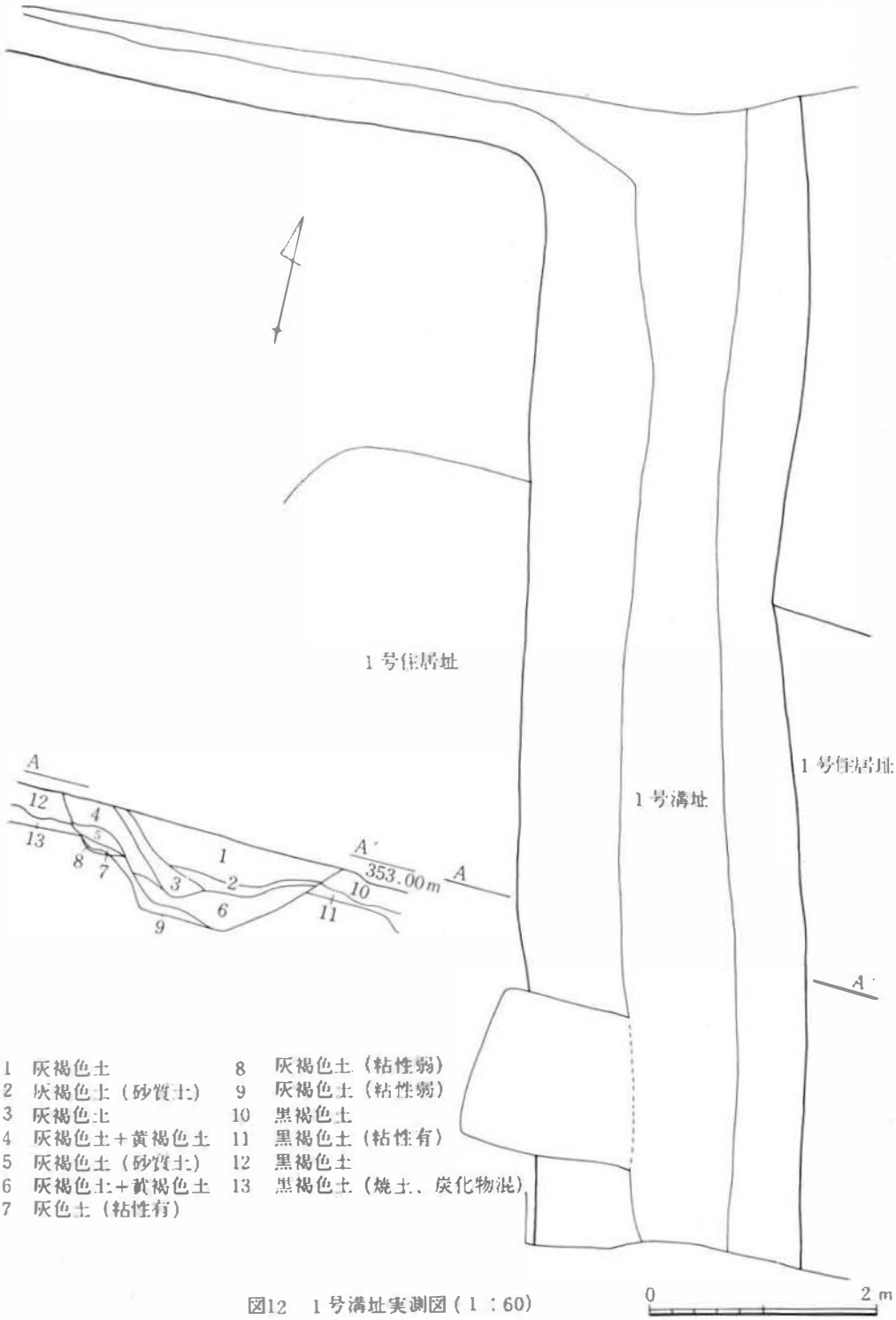


図12　1号溝址実測図（1：60）

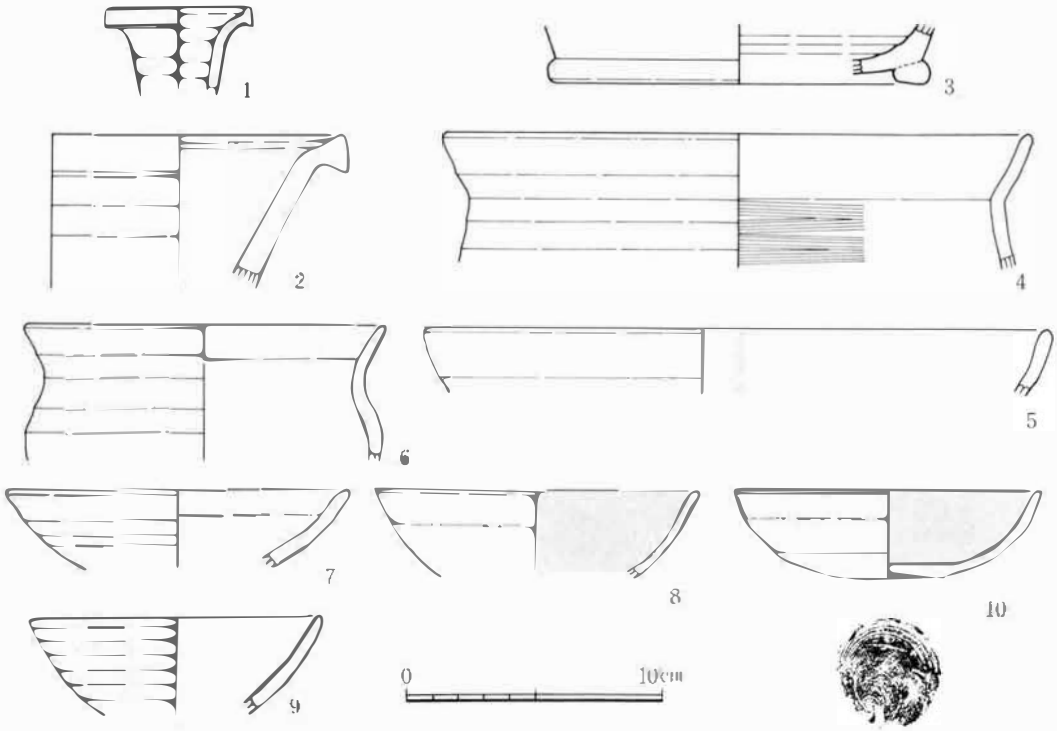


図13　1号溝址出土土器実測図（1：3）

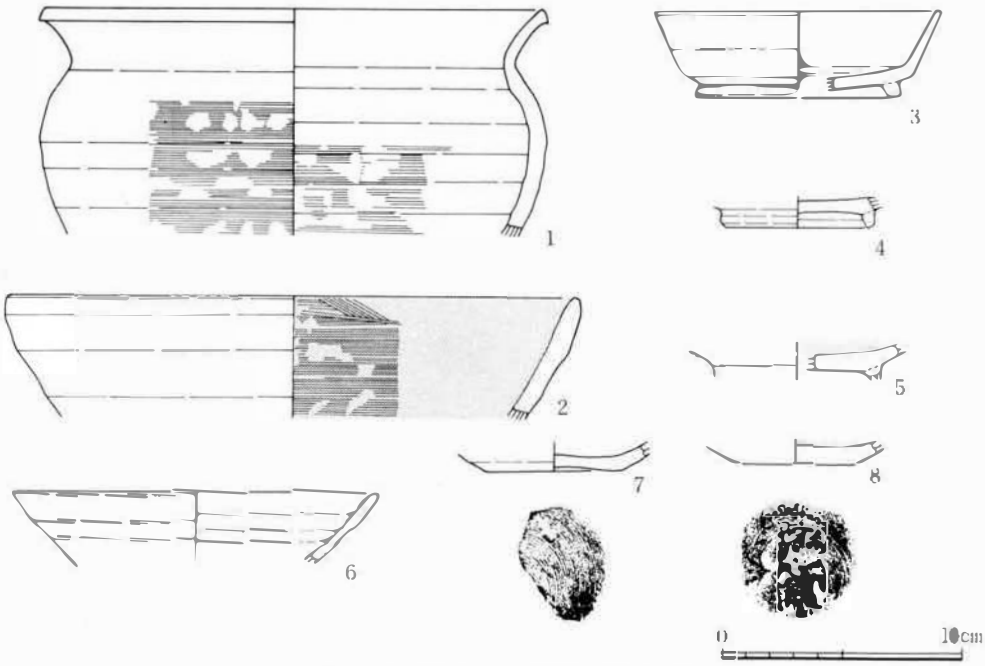


図14　検出面出土土器実測図（1：3）

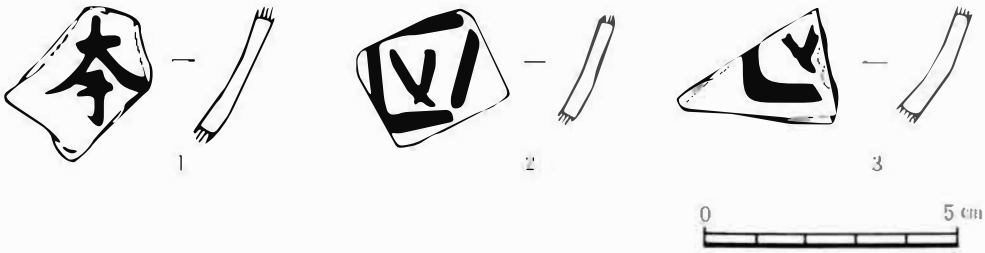


図15　墨書土器実測図（2：3）

特殊な遺物（図15）

墨書土器破片が3片検出されている。いずれも小破片で詳細は不明であるが、(1)は2号住居址、(2)・(3)は1号住居址覆土中より検出されたものである。

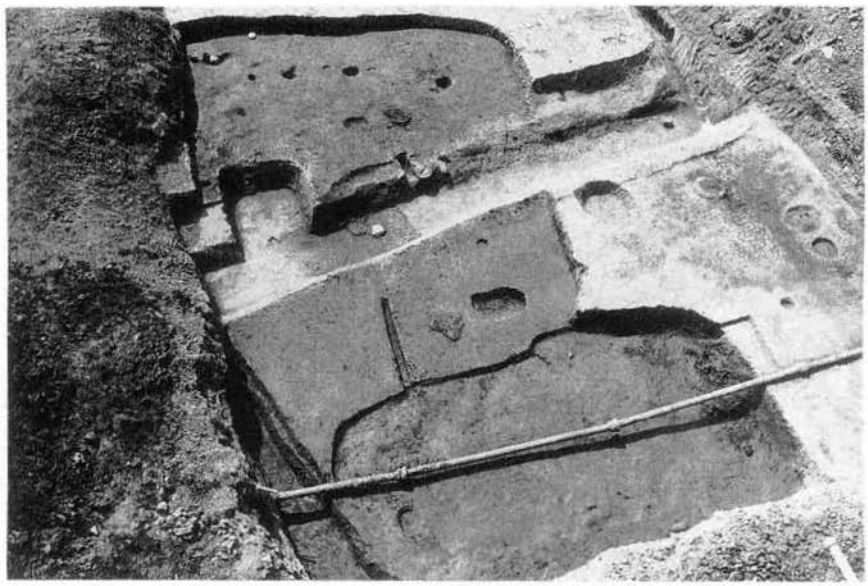
(1)は土師器坏の破片で、外面はロクロ成形痕をとどめ、明黄褐色を呈する。また内面は黒色処理がなされる。

(2)・(3)はともに須恵器坏の破片で、書かれている文字も同一文字かと思われる。

Ⅳ　調査のまとめ

芹田小学校遺跡をめぐる、歴史的環境については、Ⅱ章において詳説されているとおり、律令時代における水内郡８郷のうちの「芹田郷」に比定される点など、等閑視できない重要な側面をうかがうことができる。しかしながら、今日まで、芹田地区においての考古学的調査はほとんど着手されておらず、未開拓の分野として残されてきた感がある。今回の調査は、その実像を解明するための第一歩であり、限られた範囲ではあるが、古代芹田の一面を覗き見ることができたものといえる。

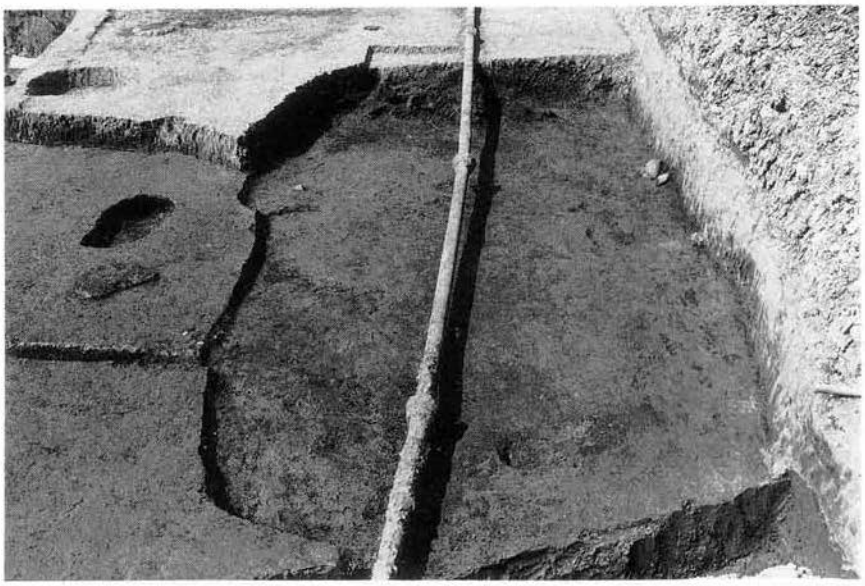
調査により確認された遺跡が、奇しくも芹田郷と関連をもつ平安時代の所産であったことは、大きな成果として位置づけられる。検出された遺構のうち、住居址は、出土遺物から平安時代の後半期ほぼ11世紀代と考えることができる。該期の竪穴式住居としては大形であり、１号住居址は一辺８ｍ近くを計測する。平安時代の標準的な住居址が一辺４ｍ程度の方形プランであることを考えれば、面積的には４倍の規模を有することとなる。２号住居址も一辺６ｍ以上を計測し、かなり大形の部類に含まれる。この２つの住居址においては、カマド等の施設が検出されておらず、その卓越した規模も考えあわせて、特殊な遺構としての性格を考慮するべきかもしれない。また、それぞれの住居址から、破片ではあるが墨書を有する土器が出土している点も注目される、遺構外から出土している遺物には、住居址の年代をさかのぼる、平安時代前半期の遺物が含まれているため、本遺跡の年代幅は、ほぼ平安時代の全般に及ぶこととなるが、調査の範囲内では、その全容を明かにするには至っていない。今後の調査にかかる期待は大きいものといえよう。



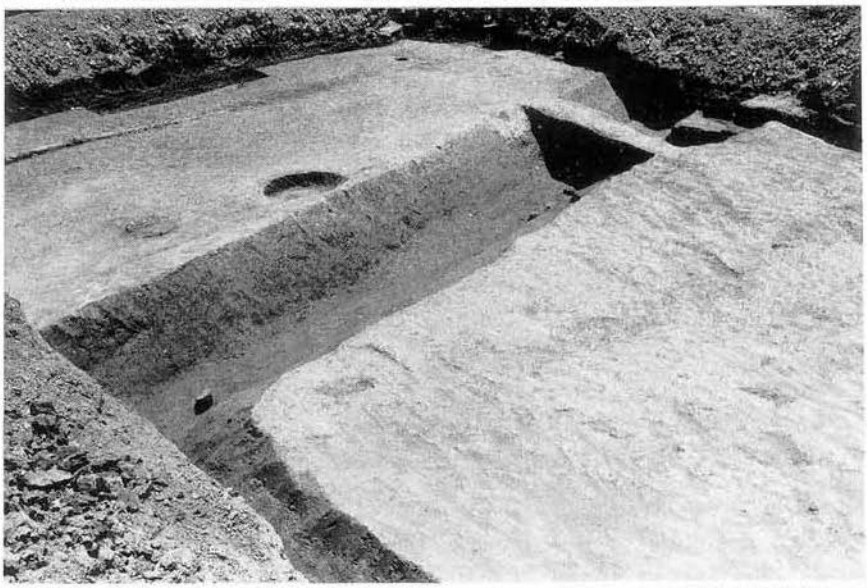
発掘区遠景

1・2号住居址、1号溝址

1号住居址、1号溝址



2 号住居址



1 号溝址

1 号溝址
推積状況

長野市の埋蔵文化財第21集

芹田小学校遺跡

——芹田小学校校舎増改築事業に
伴う発掘調査報告——

発行日　昭和62年3月31日

長野市緑町1613
発　行　長野市教育委員会

印　刷　西沢印刷株式会社